

令和7年10月31日

芦屋市議会議長 中島 健一 様

民生文教常任委員長 川上 あさえ

民生文教常任委員会 行政視察報告書

本委員会は、下記のとおり行政視察を実施しましたので、報告します。

記

- 1 日 程 令和7年10月20日（月）～10月21日（火）
- 2 視察先及び
視 察 項 目 個別最適な学びと協働的な学びについて（愛知県名古屋市）
回想法事業について（愛知県北名古屋市）
- 3 参 加 者 委 員 長 川上 あさえ
副 委 員 長 山口 みさえ
委 員 原 なつ子、西崎 薫、川島 あゆみ、
橋本 隆、田原 俊彦
随 行 市議会事務局議事調査課 高松 靖子
- 4 視察報告書 別紙のとおり

以 上

令和7年度 民生文教常任委員会 行政視察報告書

視 察 日 時	令和7年10月20日（月） 13時30分～15時00分
視 察 先	愛知県名古屋市
視 察 内 容	個別最適な学びと協働的な学びについて
視 察 目 的 (視察先選定理由)	芦屋市が取り組む「ちょうどの学び」を充実させる上で、名古屋市の先進的な教育改革「ナゴヤ・スクール・イノベーション」の施策を参考にするため。
調 査 概 要	【ナゴヤ・スクール・イノベーションの概要】 不登校やいじめ問題が深刻化する中、「一斉・画一的授業から、個別最適・協働的な学びへ」を目指す名古屋市の教育改革。授業の中にこどもの居場所を作る必要性から、「子ども一人ひとりが自ら学び続け、自分の人生を切り拓いていく力」を育てるためにスタートした。 「個別最適な学び」「協働的な学び」「子ども中心の学び」をテーマにしている。 【年次の歩み】 ・2019年：授業改善の推進事業スタート。先進的な授業をモデル校で実践 ・2020年：「ナゴヤ・スクール・イノベーション事業」として本格始動 →課題解決型学習やICT活用を中心に展開 ・2021年：「マッチングプロジェクト」開始 →学校の課題と民間の知（企業・NPO・大学など）をつなぐ取組 ・2022年：「ナゴヤ学びのコンパス」策定 →名古屋の学校教育の基本的な方向を示す「理念と指針」 ・2023年以降：「ナゴヤ・コンパス・プロジェクト」始動 →各校が主体的にプロジェクト化して取組を深化。全市展開へ 【ナゴヤ学びのコンパス】 名古屋市の学校教育を通じて目指したい姿 ◇重視したい学びの姿 1 自分に合ったペースや方法で学ぶ →学習内容・方法・時間を自分で調整する 2 多様な人と学び合う →様々な人との出会いと学び合いを大切にする 3 夢中で探究する ◇実現したい市民の姿 ・互いを認め合い、共に社会を創造する ◇目指したい子どもの姿 ・ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける

	【ナゴヤ・コンパス・プロジェクト】 教育改革を推進する5つの柱から構成 1 すすめるプロジェクト（授業実践） →各校が自校課題に応じて学びの質を高める 2 ひろがるプロジェクト（学びの機会） →「子ども中心の学び」の実践。公開授業や学習会、対話会なども 3 つながるプロジェクト（学校間連携） →小中連携・地域・企業・大学などの協働促進 4 かいぜんプロジェクト（学校運営改革、業務改善） →教員のチーム化、時間管理、業務削減などの仕組みづくり 5 つくりにプロジェクト（人材育成） →管理職と授業実践者の育成を通じて「子ども中心の学び」を実現する人材を育成 【モデル校：山吹小学校の取組】 1 山吹セレクトタイム（Y S T） ・自分のペースで進める自由進度学習 ・こどもが学習計画を立て、進捗を「単元進捗表」で管理 ・友達同士が助け合いながら進める協働学習を重視。「一斉の授業では拾いきれない子どもの多様性」を保障し、“自律して学ぶ力”と“学び合う関係性”を育てることも目的としている。 2 ふれあい活動（異学年グループ活動） ・異学年のこども同士が協働し、関係を深める活動 ・キャリア教育・社会性育成にもつながる ・上級生が下級生のY S Tをサポート、生活や学習での助け合いを通じて共助とリーダーシップを学ぶ。 【成果と課題について】 不登校やいじめの件数について認知件数自体は減少していないなど、数字上は成果が現れていないが、「学校に行きたくても来ることができない子どもを減らしたい」という点については手応えを感じているという。テストの点数のように数値化されにくいことから効果測定は困難だが、「生きる力」や「学び続ける力」に深く関わる「非認知能力」を高めることができるとしている。
所 感 （意見・感想・今後の課題等）	こどもに対する評価方法について「テストによる一斉評価」と「主体的な学びによる評価」の2つをどのように組み合わせていくべきなのかについて、芦屋市においてもさらに議論すべきであると感じた。主体的な学びを進めるに当たり、「自分の気持ちを伝えることが苦手なこども」も存在する中、どのように寄り添い、評価していくのかといった点も課題である。

	こどもたちにとって、自分たちのペースで自分に合った学び方を実践することが「子ども中心の学び」であるとの名古屋市の理念には共感する。主体的な学びを進めることは、未来を生きる力を育てる教育の核心である。 学校数が多い名古屋市と比べ、芦屋市は規模が小さい分、こどもたちの実態や特性に寄り添った教育を展開しやすい。一方で、教員の負担や人材育成、評価方法など先に指摘した課題も明らかである。これらを丁寧に乗り越えながら、芦屋市が先進的な取組を実現し、「こどもたちにとって本当に幸せな学び」を形にしていくことを強く望む。
--	--

令和7年度 民生文教常任委員会 行政視察報告書

視 察 日 時	令和7年10月21日（火） 10時00分～11時30分
視 察 先	愛知県北名古屋市
視 察 内 容	回想法事業について
視 察 目 的 （視察先選定理由）	北名古屋市の「回想法事業」を通じ、高齢者が地域の中で生きがいを持ち、心身の健康を保つ取組を学び、芦屋市の介護予防・地域福祉施策に生かすため。
調 査 概 要	◇北名古屋市とは →^{しかつ}師勝町と西春町が合併して誕生（2006年） ・所在地：愛知県西部、名古屋市の北隣（名鉄名古屋駅から名鉄線で約10分） ・人口：約8万5千人（名古屋市のベッドタウン） ・高齢化率：23.6%（2024年現在、芦屋市30.2%、全国平均29.3%） ・面積：18.4平方キロメートル（芦屋市とほぼ同じ） ◇回想法とは 1960年代にアメリカの精神科医ロバート・バトラー博士が提唱。過去の経験を再認感情（再び感情を伴って思い出す）とともに語ることで、脳を活性化させ、心を安定させる心理・社会的アプローチ。懐かしい写真や生活用品をきっかけに、思い出を語り合う活動を通して高齢者の心身の健康を支え、脳を活性化し、心の安定と社会的つながりを促す。 ◇回想法事業の成り立ち ・1998年：旧加藤家住宅の寄贈（国登録有形文化財に指定） ・2002年：国立長寿医療研究センター内科総合診療部長の遠藤英俊氏の提案を契機に国の老人保健健康推進等事業として全国初のモデル事業開始。旧加藤家住宅を回想法センターとして開設し、歴史民俗資料館を昭和生資料展示特化型の「昭和日常博物館」（収蔵品10万点以上）として開設 ・2003年：「回想法スクール」開始 ◇回想法スクールの仕組み ・対 象 者：市内在住のおおむね65歳以上の方 ・講座内容：週1回・約1時間×6回コース。懐かしい道具や写真などを用い、昔の生活を語り合う。 ・定 員 等：10人前後。年3回（うち1回は男性専科）で、スタッフとしてリーダー1人＋コリーダー1～2人 ・進行方法：あいさつ→テーマ提示→語り合い→まとめ→スタッフの振り返り 「3つの約束」（話を外に出さない・否定しない・無理に話させない）を大切にしている。 ・主なテーマ構成（回想法キットを活用）

スターターキット：洗濯板・アイロン・弁当箱・お手玉など

→家事やこども時代の思い出を語る

小学校の思い出：教科書・ノート・給食用具・学生帽など

→学校生活や友人関係を回想

こどもの頃の遊び：ビー玉、竹とんぼ、けん玉・おはじきなど

→遊びや友達、家族との関わりを思い出す

夏の思い出：蚊帳・ラムネ瓶・サイダー瓶など

→夏休みやお祭り、季節行事を話題に

寒い冬の支度：炭火こたつ・湯たんぽ・毛糸の靴下など

→冬の暮らしの知恵や家族団らんを語る

身近な暮らしの品々：黒電話・氷まくら・下駄など

→昔の生活道具を手に取りながら語り合う

※スクール卒業生を「いきいき隊」として組織化し、月1～2回、手芸・お花見など自主活動を実施。86グループ764人が地域で活躍（2024年度末時点）

※回想法キットは、昭和の生活用品をテーマ別にまとめ、全国へ貸出し（1箱1週間1,000円）しており、教室や福祉施設でも活用可能となっている。

◇回想法スクール「男性専科」の特徴

- ・2009年度開始。男性の参加を促す工夫として効果的
- ・「働き方」「趣味」「青春時代」「初恋の思い出」など男性が語りやすいテーマを設定し、その後のグループ活動（自主活動）の参加率が高い。

◇昭和日常博物館と地域回想法の連携

北名古屋市の歴史民俗資料館として、昭和時代の暮らしを再現した展示を行う施設で、テレビ、冷蔵庫、ちゃぶ台など懐かしい生活道具を通して、来館者の記憶や感情を呼び起こす空間となっている。展示室には、戦後の暮らしを体感できる「昭和の街角」や生活用品が数多く並び、世代を超えて会話が生まれる場でもある。

回想法との連携として博物館が収集した膨大な生活資料（昭和コレクション）は、単なる展示物にとどまらず、回想法の素材として活用されている。

◇効果測定の結果

- ・2003年、2004年のスクール参加者44人を3年間追跡した結果、心の健康に有意な改善。2008～2012年の参加者184人を対象に調査した結果、「手の運動」「位置判断」「単語記憶」の得点が上昇→認知症予防効果を示唆
- ・医療費削減効果も出ている。2003年度データとして回想法スクール参加者20人（平均年齢74歳、男性3名・女性17名）の医療費推移を見ると、参加前3年：月平均医療費2,299円、参加中1年：2,042円、参加後1年：1,872円→回想法への参加によって、月当たり427円の医療費が減少（18.6%の削減効果）
- ・2002年度データとして回想法参加群と非参加群の医療費比較による分析をした結果、参加群（n=21）の1年目：5,042円 2年目：5,168円（わずかな増加）、

	一方、非参加群（$n = 20$）、1年目：5,029円、2年目：7,952円（58.1%増加） →参加者はほぼ横ばい、非参加者は顕著な増加。回想法への参加が医療費の上昇を抑制する効果を示す。 ◇回想法事業の課題について ・回想法スクール参加者が集まりにくい：社会変化により高齢者自身が多忙（仕事、孫の世話など）となり、定期的な受講が難しい。募集しても、定員に届かない回も見られる。 ・スクール終了後の「いきいき隊」への移行が難しい：スクールで意欲が高まっても、次の段階である地域活動（いきいき隊）に参加しない人が一定数いる。スタッフのサポートが不可欠だが、人的体制に限界がある。 ・「いきいき隊」の高齢化：メンバーの高齢化で、活動継続が難しくなるケースもあり、世代交代も課題 ・回想法を取り巻く世代の変化：昭和の道具を「知らない世代」も増えてきている。時代や対象者に合わせた新しいテーマや教材への更新も必要
所 感 (意見・感想・今後の課題等)	北名古屋市で20年以上にわたって「回想法事業」が継続できたのは、「回想法センター」や「昭和日常博物館」といった拠点があったことが大きな要因。芦屋市でも高齢者が学び合うシニアカレッジ「芦屋川カレッジ」があり、受講生らによる自主的な地域活動などが行われているが拠点性はなく、同様の事業に関しては持続性の問題が生じるだろう。回想法の魅力は、実際に手に取れる生活資料（昭和の道具や写真など）にあるが、芦屋市では博物館機能や地域資料を専門的に保管する施設が限られている。小規模なサロンや自治会、介護施設、認知症カフェなどで「分散型・市民協働型の回想法事業」をつくり上げ、こどもの頃の思い出を語り合う場所を提供することや昔の写真などを活用した「まちの記憶」を復活させる取組も有用かもしれない。 高齢化率が全国平均を上回る芦屋市においては、高齢者の生きがいつくりや健康づくり、認知症予防は今後ますます重要性を帯びる。北名古屋市の取組を参考に地域資源を見詰め直し、高齢者施策につなげていきたい。

視察の様子（令和7年度 民生文教常任委員会）

視 察 先 ①

10月20日
愛知県名古屋市



名古屋市役所を訪問しました。



新しい学校づくり推進課の職員の方にご説明いただきました。

視 察 先 ②

1 0 月 2 1 日
愛知県北名古屋市



北名古屋市役所を訪問しました。



高齢福祉課地域包括ケア推進室の職員の方にご説明をいただきました。

※この「視察の様子」のページは市議会事務局職員が作成しています。